アドヴォカシーとは何か：全国成人生涯継続教育協会の経験から

アラン・タケット
生 津 知 子 訳

Advocacy: The experience of the National Institute of Adult Continuing Education

Alan TUCKETT
Tomoko NAMAZU (tra.)

「成人教育文化の中で成人は、他の成人を次の方法で教育する。注意を引くために太鼓をたたくこと。フォークソングを歌い、拡声器を使ってメッセージを叫ぶこと。壁にポスターを貼り、展示活動を行うこと。街角や公園で政治的・宗教的な集会を催すこと。ラジオやテレビでメッセージを伝えること。」

Harbans Bhola

完全に秩序の整った世界では、以下のことが実現するだろう。まず成人学習の問題は、子どもを教育する問題と同じように十分に理解されるだろう。政治家や教育計画者、提供者だけでなく、学習者および潜在的な学習者もまた、成人学習に参加することが成人自身および彼らが住むコミュニティに利益をもたらすことをはっきりと理解しているだろう。教育提供者は、成人の生活に影響を与えているほかの圧力を考慮に入れると、学習プログラムを立てる際には柔軟性が必要なことを認識するだろう。教育提供者は、成人学習者のそれまでの経験をうまく引き出す技能を持っているだろう。成人学習のコースのすべては、成人が用いる学習方策の多様性をうまく調整できるよう構成されているだろう。コミュニティのあらゆる階層の成人が、平等に学習に参加することだろう。建物は機能的でみごとなものであるだろう。提供される教育は、常に質的に高いものであり、すべての人に教育を提供できるだけの十分なお金があるだろう。

われわれは、いまだそのような社会に到達しえていない。すくなくともイギリスはそうである。Jacques Delors が認識したように（CEU, 1994)、そのような社会に到達するまで、政治家や教育計画者、そして学習者自身に次のことを気づかせる必要があるだろう。物事はよりうまく行うことが可能だということ、そして、成人学習が経済的繁栄および社会的結合を確保するための鍵となる役割を果たすということである。われわれは、政策決定者の抱く理想と、現実として学習者が利用できる選択肢とのギャップに目を向ける必要があるだろう。また、成人

と関わる仕事において、優れた実践を促進し、普及させる必要もある。

もし生涯学習がすべての人に意義あるものとして役立てられるなら、そこには、十分に情報を得た能動的な市民、民主的な参加や討議を行うことに長けた市民、変化をうまく乗り越えることのできる市民を確保するための方策が含まれるだろう。もし周辺化された集団にとってもアクセスが可能となるなら、生涯学習は、さまざまな集団の異なる状況やニーズを認めるものとなるだろう。このような目的のために、ボランタリー組織は、教育サービスを提供するためのオルタナティブなモデルを開発するだけでなく、いかに物事を違ったやり方で行い、より良くするかを考えていくという点においても、鍵となる役割を担っているのである。本質的には、これがアドヴォカシーという活動なのである。

この論文では、広範な会員基盤を持つある全国規模の非政府組織が、イングランドとウェールズにおいて以上のようなことをいかに行っているかを探り、アドヴォカシー活動が成人教育ないし社会教育のいかなるプログラムにおいても中核的なものであることを論じていく。

全国成人生涯継続教育協会（NIACE）は、1921年、英国成人教育協会として創設された。総合的な目標は、「成人生涯継続教育の研究の促進と全般的な進展」であり、そのメンバーの優先事項は、より多くの異なる成人学習者を確保することである。NIACE は慈善団体であり、保証人と広範な会員による有限会社である。会員には、大学や継続教育カレッジ、地方当局の成人教育提供機関（労働者教育協会、フォード社、労働組合評議会、全国女性協会連盟、ナショナルトラスト、英国放送協会やその他のテレビ局、産業大学、防衛省、各種芸術団体、図書館、博物館、多くの地方部局）が含まれている。NIACE は、中央政府および地方自治体から全体予算の10%に相当する助成金を得ている。また、多分野にわたるコンサルタント業、研究活動、開発事業、出版活動、会議、促進活動、慈善的・ビジネス的な財源からの資金調達活動を通して収支の均衡を保っている。

NIACE は、政府との間に、批判的な友人としての緊密で影響力ある関係性を有している。NIACE は、非政府組織（ＮＧＯ）と政党との役割には類似性もあるが、鍵となる違いがあると信じている。民主主義における政党は多様な尺度を提供するが、総合すれば、そのことが一般的な利害がいかに保障されるかについての見解を有権者に提供するのである。他方、ＮＧＯは、ある特定の利害を代表する。ＮＧＯの仕事は、一般的な利害が定着しているとき、それら特定の利害が忘れ去られることがないよう努めることである。両者ともに、才能、想像力、および自らの議論が注目を集め、説得力を持つための確固たる証拠を必要とする。しかし、相手を驚かすことは、政治家にとって重要な武器であるが、ＮＧＯの仕事では、ほとんどないし全く行わないものと NIACE は信じている。NIACE は、長期的な観点に立って、成人学習者をめぐるさまざまな事柄を改善していく変革の達成にかかわるのである。政治家ないし役人に彼らの判断を変える決定を強いることでは、NIACE が得るものはほとんど何もないだろう。

NIACEは、自分たちの事業には、次の8つの中核的機能があると確認している。その中で最も重要な機能は、アドヴォカシー活動である。

- 成人学習者や彼らに奉仕する諸団体の利害を代表すること。
- イギリスや他の国々の成人生涯継続教育を促進する組織、機関、個人との協力関係を発展させること。
- 調査や研究活動を行うこと。
- 情報を集め、広めること。
- 会議、セミナー、ミーティングを召集すること。
- 刊行物を出版、配布すること。
- 特別プロジェクトに着手し、NIACE委員会によってつくられた特別部局を取りまとめること。
- NIACEの事業ないしNIACEが責任を負う部局の事業を促進するために、資産の貸借、売買をすること。

最後の項目はおそらく別として、他の機能のすべては、成人学習者の利害を代表するための能力を高めていくものである。

NIACEが設立されて間もない頃、事務局長であったW. E. Williamsは、South Midlandの大きな町であるNorthamptonでは、公に展示されている芸術作品が無いことに気づいた。彼は、住んでいる地方の美的財産や最新の文化的実践を手近なところで味わう機会がないのなら、市民として十分な生活を送ることは困難であると判断した。当時のNIACEは、芸術にアクセスする必要性を明示するため、1930年代半ば、慈善団体からの支援を受け、展示会を見て回るプログラム「人々のための芸術（Art for the People)」を組織した。同時にWilliamsらは、この問題は国策に関わるとして政府を説得し始めた。ＮＧＯによって進められたその地道な意思表示の活動から、「音楽・芸術推進協議会」が設立されることとなり、Williamsが初代事務総長を務めた。ニーズおよび、それを満たす実践的な方策を見極めることは、効果的なアドヴォカシー活動の核となる部分である。しかし、ロビイング活動および公開討論もまた、問題があること、提起された解決策が役に立つだろうことを政策決定者に受け入れてもらうために必要であり、重要だといえる（Williams, 1971)。

Williamsにはかなりの革新力があり、1939年から45年の戦争時、国軍に徴兵された軍人に対する時事問題プログラムとして「軍隊時事問題部（the Army Bureau of Current Affairs)」をつくり上げた。陸・海・空の軍人および女性が、週に一度の成人教育コースで社会的・政治的問題を議論できるよう、資料が準備され、すべての部隊に配布された。時事解説者の何人かは、1945年の選挙での国軍による熱狂的な福祉の支持はこのプログラムの成果であると考えている。以上の先導的行為のどちらも、成功したアドヴォカシー活動の例証である。しかし、両者ともトップダウン方式の政策展開の産物であり、アドヴォカシー活動は、中央志向の変革を確保する方向へうまく導かれていた。

しかしながら、成人学習は、政府の決定によるものと同じくらい、ボトムアップ方式という新機軸によって形作られている点で初等教育と異なっている。1970年代の成人識字キャンペーンはボランタリー組織の中で始まり、その多くは教育よりむしろ私的な社会奉仕活動を通してインナーシティの貧困を改善するよう構想された。採用されたモデルは、ボランティアのテューターとの一対一の個人指導を中心とするものであり、驚くまでもなく、クラスを基盤とした教授活動よりも社会事業活動にならってつくられたのである。非識字根絶への資金投与や国家的関与を要求する「読む権利キャンペーン（a Right To Read campaign)」を始めるため、諸機関が連合した。(Tuckett, 2001)。

NIACE は、メンバーに同キャンペーンを支援するようせき立てられた。英国放送協会は、ゴールデンタイムのテレビシリーズとして、識字問題を抱える多くの成人が支援を求める起爆剤となるような番組 *On The Move* を放映することを決めた。最終的に政府は、全国部局を NIACE の中に設置するための資金を短期間援助することで応えてきた。25年後、いまやその部局は「基礎技能局（the Basic Skills Agency)」となって独立し、かなりの資金を蓄えている。「読む権利キャンペーン」の運動家は、100万人の成人が識字問題を抱えていると見積もってきた。1999年の基礎技能に関する政府の報告書では、イギリスにおいては700万人の成人が基礎技能のニーズを抱えていることが示された。そして、成人の基礎教育に対し、政府間でのかなりの優先権および資金が与られることになった（Moser, 1999)。

25年もの年月は、ひとつの問題が継続的に系統立てられた方法で取り組まれるのを待つには長いといえる。しかし、1970年代の識字キャンペーンでのアドヴォカシー活動は、Moser 報告書の前に成果をあげている。1970年代までの基礎教育プログラムは、参加者に対して過度に恩着せがましいものであり、彼らの熱意を下げていた。成人識字キャンペーンをつくり上げた実践家たちは、このアプローチを拒んだ。Jane Mace の言うように、当時は、失敗した社会政策の犠牲者を非難する慣習があったのである。まず、人々に読み方を教えることができていない。そして、モチベーション、理解力ないし知が欠如しているとして学習者を責めるのである。同年代の労働者作家運動のような識字キャンペーンは、新たな読み手が書き手として言うべきことに焦点を当てた。雑誌 *Write First Time* は、労働者階級の人々が書くという新たな要素が小さな出版物から生まれたとして、学習者の発言権の開花を記録した。このような活動は文化的な産物であった。また、学習者に第二のチャンスを保障していくため、教育政策における優先順位を再編成することを強く主張しもした。そのキャンペーンは、NIACE にも新たな活力を与え、社会的に排除されている人々、周辺化されている人々のために NIACE が先導的役割を担うことになった。1980年代は、このような活動の潮流によって、女性、黒人、その他の少数民族集団に平等な機会を保障するため、そして失業中の成人を支援するために構想された活動プログラムが登場することになった。

その後しばしば、政策を改めていくための第一歩は、不公平の問題に取り組むという関心か

ら生じてきている。このことは、イングランド教育雇用局の前大臣 David Blunkett も認めるところであった。彼は、社会変革の媒介としての成人教育の役割を、そして自らの窮地から抜け出す方法を学ぶために労働者階級一般の人々は団結することができるということを強く信じていた。1998年の緑書 *The Learning Age* の序文で、彼は次のように主張した。

> *「われわれが、学習の優れた伝統を持つこの国にいるのは幸運である。われわれは、ヴィクトリア朝時代の産業コミュニティの優れたセルフヘルプ運動の遺物を財産としてきた。しばしば絶望的な貧困の中で生きつつも、男女ともに、自分自身そして自分の家族を向上させるよう決定してきた。人々がそうしたのは、図書館の設立、労働者機関での研究、初期の労働組合の先駆的努力、夜間のクラス、公開講座、文通のコースを通じてである。学習は人々の生活を豊かにし、その結果、人々は社会全体を豊かにしたのである」*（DfES, 1998）。

同様の見解は、1992年に論議された、日本の生涯学習審議会の考えを形作った。

> *「人々が生涯学習に取り組むのは、自己の向上ないし職業上の出世というだけでなく、社会的貢献あるいは他者を教える機会を増やすためにも望ましいことである。（中略）ボランティア活動は、生涯学習だけでなく、社会的諸問題にも密接に関わっている。ゆえに、そのような活動は、豊かで活力ある社会の進展、そして生涯学習社会の構築のために重要なのである」*（Lifelong Learning Council, 1992。Belanger and Federighi, 2000で引用されたもの）。

けれども、ボランタリー組織が革新的で創造的であるという保障はない。識字キャンペーンや次に続いた平等な機会を求めるプログラムは、学習者を代表して声をあげようとする NIACE のような団体自体が、どれだけ効果的に代弁している多様な層の人々の声に耳を傾けているかを絶えず探究していくことの必要性を明らかにしている。それらの団体はまた、新しい活力に開かれる必要があるし、他の先導者たちを支える技能を用いていく必要もあるのである。

この経験のすべては、1990年代初頭、当時の保守党政権が、労働市場にとって即効的な価値を持たず、資格に結びつかない成人教育分野への公的支援のすべてを終えると提案したとき、発揮されることとなった。これらの提案自体は、保守的なシンクタンクによるひとつの効果的なアドヴォカシー活動から生じた。*Away with LEAs*（Lawlor, 1990）において Sheila Lawlor は、個人的な充足のための成人教育に用いられるお金は、事実上学校から盗んだお金であると述べた。彼女は、そのような成人教育活動のうち最も不利な状況にあるものだけに公的助成金を投入すべきだと主張し、さらに、社会サービスの予算からお金が捻出されるべきだと述べた。概して、彼女の主張は、白書 *Learning for the Twenty First Century*（DES/

EDG, 1991）において政府に受け入れられた。そこでの関心は、限られた国家支出は、イギリスの経済競争に即時的なインパクトを持つ領域に焦点づけられる必要があるというものであった。能力が高く、熟練した労働力を確保する際、イギリスは、国際的な競争相手と比べ、グローバリゼーションからの圧力が増大しており、成績も芳しくないためである。この白書に関する初期の国会の議論では、フラワーアレンジメントのために国庫から資金を提供する理由は十分にないことが主張された。

NIACE はすぐに、これらの議論に異論を唱えるため行動を起こした。まず最初の行動として、政府の提案の要約およびそれに対する批判を広範囲にわたって発表した。この行動の根本にあるものは、経済を支えるための学びに優先権が与えられることを誰もが認めているのだが、成人教育は、同じくらい重要な他の多くの役割を果たしているということであった。それは、高齢成人が長い間積極的に社会参加できるようにすること、精神的な病から立ち直った人々が人間関係を再構築するための安全な環境を提供すること、家族学習（family learning）を通じて親に対する支援を確保すること、教育に戻る第一歩を踏み出している学習者に自信をつけてもらうこと、多元的な民主主義国家を特徴付ける複雑な市民社会活動の網の目を強化すること、といった役割である。

NIACE は、政府の提案の要約およびそれに対する批判を、さまざまな政治家、報道機関、教育提供者に配布した。第二に、そのことは、地方自治体協会および全国女性協会連盟（社会教育を含む広範囲な活動を提供している、グレートブリテン島の田舎にあるさまざまな女性組織の連盟）という重要な協力者を確保した。全国規模での署名運動は、ほんの 2 週間強で50万人もの署名を集めた。全国女性協会連盟の9,000の地方支部は、個々のメンバーに対し政治家に手紙を書くよう奨励した。それによって下院議員たちは、かなり評判の悪い人頭税によって生じるのと同じくらい多くの投書を受け取ることになった。第三に、NIACE は、自分たちの経験について報道機関に話したがっており、なおかつ話すことのできる学習者を見つけ出した。よくあるフラワーアレンジメントへの中傷に応えるため、NIACE は、かつて商業銀行家として働いていた Brixton（1980年代の市民紛争の場で、黒人のイギリス人にとっての中心地）在住の一人の花屋をさがし出した。その花屋の男性は、地元の South London の成人教育機関でフラワーアレンジメントクラスを受講し、自分の転職の準備をしたのである。さらに彼は、他の受講者のほぼ半分を自分の店で労働者として雇い、職業訓練として新たな労働者をそのクラスに派遣した。そして、*The Independent* 紙の Donald MacLeod に訴えかけ、その話を主要な特集記事にしてもらったのだ。数日内に、政治家たちは次のように言っていた。「もちろんわれわれは、フラワーアレンジメントが花屋業界での成功に結びつきうることを知っている。」

同キャンペーンでの NIACE の鍵となる役割は、すべての人に新しい情勢を積極的に知らしめること、国策の事例を十分に解説していくことであった。キャンペーンで政治への注目度が高まったことによって、「成人教育のための国会全政党委員会」が再建され、NIACE はその

事務局となった。6週間以内に政府は提案を変え、資格付与を行わない成人教育に対して、地方教育当局による教育サービスの一部として資金を与えつづけるべきことを認めた。しかしながら、財政的援助はあまり大きくなかった。また、1992年の「継続・高等教育法」によってつくられた、資格を付与する成人教育とそうでない成人教育との人為的な区別は、2001年までなくならなかった（Tuckett, 1996)。

このような状況にもかかわらず、キャンペーンは、NIACEと政府およびNIACEとNIACE支援者との関係性にかなりの影響を与えた。政府の提案に正面から異議を唱えようと決心するのは、それほど困難なことではなかった。政府の提案は、NIACEの観点からすれば、成人の学習という道のりの複雑さを考慮してなかったし、周辺化されているグループをさらに排除する危険性を持っていたのである。しかしながら、教育国務大臣Tim Eggarの次のような発言が報じられた。「私はNIACEが行っていることに反対はしない。しかしなぜわれわれが、NIACEへの助成金が危機的状況であることを考慮して、NIACEにお金を出すべきなのだろうか？」対照的に、NIACEの会員団体は、NIACEの事業を最大限支援すると表明した。法案が国会を通過するとき、NIACEは、全政党の政治家に検討中の問題について説明し、中央政府の役人との効果的な見直しのプロセスを発展させた。それは、対立する部分を最小限にするためであり、国策という制限の中で法律の条項が成人学習者に最大限の利益を与えることを保障するためでもある。

このプロセスは、いくらかの緻密さを要求した。政策のどの領域に対しNIACEは同意しないのかをはっきりさせながら、政策という枠組みの中で成人学習者を支援するための最も効果的な手段を追い求める政府と対話することが重要であった。NIACEは常に、政策についての意見の相違をいかに追及するつもりであるかを政府に伝えるよう決めてきた。そのことは、「成人教育に関する国会全政党グループ」からNIACEの事業に対する温かい支援を得たように、対話が開かれている状態を保つこと、国策の転換を少なくすることに役立った。成人教育の分野を最新のものに保つことも重要だった。政治家たちは、多くの成人が学習に戻る第一歩として、適度な地方のコミュニティ教育が必要であることに納得した。その議論は、Eggarの次の大臣であるTim Boswellによって受け入れられた。彼は、「フォーマル教育の大部分の過程を経験してこなかった成人が、資格付与を行うコースに一直線に向かうことは極めて妙なことである。例えば、技能を最新のものにしていこうとするのに必要な自信、その自信を植え付けてくれるかもしれない非職業的なコースへの参加によって、成人が学習に引き戻されるという主張を私は大いに受け入れる」と述べた（Boserll, 1993)。

立法上の論争が続いていた間、NIACEは、1992年に第一回の「成人学習者週間（Adult Learners' Week)」を導入することを計画した。「成人学習者週間」は、1992年の「継続・高等教育法」に関する議論が終わった後すぐに行われるよう調整された。NIACEは、すべての複雑な要素を考慮して成人学習者像を浮き彫りにすること、既存の学習者を祝うこと、他者を

参加するよう動機付けることに関心を持っていた。主要な地上波放送のテレビ局のすべてが、成人学習を祝う番組を作ることに同意した。また、潜在的な学習者のために無料の電話支援サービスが開始されたり、目立った成人学習者に対する全国的・地域的な賞が設けられたりした。国会で歓迎会が催され、全国的な政策会議が開かれ、地方でたくさんの活動が展開された。著名人は無償で活動に参加した。報道記事は1,000件を超え、そのすべてが、学ぶのに遅すぎることは決してないという言説を支持していた。55,000人の人々が電話支援サービスに電話をしてきた。彼らの半分以上が長い間失業状態にあり、彼らの３分の１が３ケ月以内にコースを受講した。NIACE は、参加に関する新しい研究成果を発表し、広く注目を集めた。以後、「成人学習者週間」は、毎年の教育カレンダーにおける中核的な存在となっている。

「成人学習者週間」は、NIACE のアドヴォカシー活動に対して、多くの重要な教訓を明らかにした。第一の教訓は、政党はバリケードとしてよりも奮闘の場としてより有効なものだということであった。政策決定者を、成人学習によって生活が変容してきた学習者に引き合わせることで、フラワーアレンジメント対する古いステレオタイプは克服された。いまや国会において誰も、かつてのように単純に話をしていない。自分の生活を変えようと努力してきた個々の学習者やグループの話はいまや、国会議員たちの議論の骨子なのである。人々は、「優雅なフロックの時代」を敬愛しており、しばしばより私的な活動のものを公的な式典に取り入れるために言い訳することを好むのである。

第二の教訓は、「成人学習者週間」のような場では、頑として同意してこなかった人々が一緒になって、将来的にともに活動していくための最善の方法を探るようになるということであった。不思議なことに、ボランタリー組織が、活発にキャンペーン活動を行いつつも、開かれたやり方で役人や政治家たちと活動してきたところでは、信頼のレベルは減少するよりも高まりうるのである。

第三の鍵となる教訓は、効果的なパートナーシップは孤立した活動よりずっと多くのものを達成するということであった。「成人学習者週間」の始めから、NIACE は、中核的なイベントを多く組織しただけだった。NIACE は、「成人学習者週間」を、自分の言葉で自分の目的に見合うものにするよう他者を励ました。対立が生じたところでは、NIACE は即座にわびを入れた。NIACE は、「成人学習者週間」がＮＧＯではなく、学習者のためのものであることを明確にした。このことは、NIACE が享受する信頼性をいっそう強めることとなった。

ここ10年以上の間に出てきた第四の教訓は、「成人学習者週間」が、成人学習者に影響を与える政策展開に焦点を当てる機会を毎年提供し、異なる社会政策の潮流を越えたイニシアチブを確保すること（健康と教育を結びつけて考えること、地方の経済復興における成人学習の役割および、学習と文化産業のつながりに目を向けること）に有効な時間を提供したということであった。「成人学習者週間」はまた、重要な研究論文を発表する機会を提供した。いまや

NIACE は毎年、学習社会を創造する意欲がどれほど大衆の経験の中に生じているかを明らかにするための、参加に関する全国調査を委託している。結論として、学習が豊かな場合と貧しい場合の間には持続的な違いがあることが示されている。1992年以降、その調査研究は、立法上の変革が高齢者の参加率に与える影響についても明らかにしてきた。そこでは、資格付与を行わない成人教育の提供が減少するにつれて、年金受給者の参加率に40%の落ちが見られた。NIACE の量的な調査は、参加と達成への障壁および、その障壁を克服するのに効果的な方策の説明に焦点を当てた質的研究によって支持されている。総合すれば、量的・質的研究は、将来的な政策展開事業への重要な課題を明らかにしているのである。同時に、全国的な政策会議は、分野の異なる領域（家族学習から職場学習に至るまで、図書館や博物館の役割から草の根コミュニティ組織のイニシアチブに至るまで）に焦点を当てる機会を提供している。

最後の教訓は、1992年から10年間、NIACE の活動を形作ってきたものである。それはまず、学習者自身が最高のアドヴォカシー活動家だということである。そして、成人学習組織は、学習者が能動的で参加意欲旺盛な市民、自分自身の学習経験の主体および形成者となるための能力を意識的に築いていく必要があるということである。学習困難を持つ成人に対して、NIACEの活動は、できるだけ自立した能動的な市民性を支える学習権の憲章を、学習者が自覚し、発表し、広めていくのを支援することに焦点づけられてきた。その憲章は、NIACE の専門スタッフである Jeannie Sutcliffe と Yola Jacobsen の支援を受けつつ、学習困難を持つ学習者によってつくり上げられたプロジェクト作業の成果であった。10の提議からなり、それぞれに注釈的なフレーズがついている。より効果的に学習困難を持つ成人の話を聞くことを学びたい専門家にとって、実践的な憲章となっている。憲章 *Our Right to Learn* は次のことを要求する。

- **声をあげる権利** ──「われわれは、発言権を持った成人である。われわれの声を聞いてほしい。」
- **クラスに行くことを選択する権利** ──「われわれは、自分が何を学ぶかについて発言の機会を持つべきである。」
- **支援を受ける権利** ──「支援をうけるために誰かに頼ることができる。」
- **友人をつくる機会を持つ権利** ──「今よりもう少しだけ人ごみに混じって、新しい友達をつくっていく。」
- **楽しく学習する権利** ──「楽しく学習すればするほど、もっと学びたくなる。」
- **快適なアクセスの権利** ──「乗り物、照明、車椅子のためのスペース。」
- **いじめられない権利** ──「いじめをなくしなさい。みんな平等なのだ。」
- **成人として尊敬の念を持って扱われる権利** ──「成人としてわれわれに話し掛けなさい。」
- **われわれが理解できる明確な情報を得る権利** ──「情報は容易に理解できることが必要である。それは複雑すぎている。」
- **よい教えを受ける権利** ──「自分の学びを支援してくれる良い教師を必要としている。」

- **仕事を得るためのコースに参加できる権利** ――「仕事を得ることができるかもしれない技能をわれわれに与えてほしい。」
- **快適な場所で学ぶ権利** ――「居心地がいいと感じる場所で」(Jacobsen, 2000)。

憲章は、説得力をもって次のように解釈できる。すなわち憲章は、十分に達成された自立的生活の追求に学習を用いる際、どのような種類の学習が学習困難を持つ成人を支援するのかということを明確にするだけでなく、現実の多くの場面で提供されているものと理想との間にあるギャップがいかに大きいかをそっと伝えもするのである。提供される教育のかなり多くは、カリキュラムも狭く、教えに独創性もなく、物理的設備も貧しいものとなってしまっている。そのような現状と、「イエスと歴史、雷と稲妻」について学びたいという、一人の学習者のこみ上げる思いを比べてみなさい (Sutcliffe, 1990)。

学習者は、高齢者への学習機会を改善するための事例を展開し、高齢成人に彼らの興味の範囲を広げるよう励ます際、鍵となる役割を果たしてきた。印象的なのは、「成人学習者週間」の活動の一部として、ある年金受給者グループが「みっともなく年を取る (Growing Old Disgracefully)」というプログラムを組織したことである。それは、イギリス北西部のMerseyside の高齢成人が若いときに禁じていたことをやるというイベントプログラムであった。ある女性グループは、屋根のない 2 階建てバスでオペラをうたいながら Liverpool の中心街を旅した。別の学習者たちは、Mersey 川で水上スキーをやった。より慣例的な活動として、「サードエイジの大学 (the University of the Third Age)」という運動を組織している退職者たちが、NIACE の「年を取ってより大胆に (Older & Bolder)」というプログラム (成人教育の政策と実践におけるエイジズムに異議を唱えるプログラム) に積極的に寄与している (Carlton and Soulsby, 1998)。NIACE 自体は、イギリス最高齢の学習者を見つけ出すという新しい企画の準備に寄与した。Fred Morre は現在108歳であり、イギリス最高齢であるが、Hampchire の New Milton の芸術クラスで定期的に学んでいる。これらの企画は、広範囲にわたって共感的にマスコミに報じられ、学習と年齢に対する国民の態度を変化させることに貢献している。

だが、まさに重要なことは、教育提供者たちの中にある態度を変えることである。コースの構成、タイミング、学習支援の調整は、あまりにもフルタイムの青年学習者のニーズを心に留めてデザインされている。教育提供者にとって、成人学習者の生活におけるその他の用事を無視することは簡単である。成人学習者は、他の義務から残された場所に学習を押し込まねばならないのである。またしても、このようなメッセージは、学習者自身による経験の記述を通して非常に印象的に伝えられている。例として、家族が必ずしも成人学習を心から支援してくれるわけではないことを明らかにした、オープン・ユニバーシティの学生による次のような記述もある。

「10時から1時までエッセイの勉強を続けています。私は自分が勉強してきた期間について、中等教育一般試験のために勉強している娘に説明しました。彼女は私のやっていることは時間の無駄だと感じています。おそらく彼女は正しいでしょうが、私は本当に学習を楽しんでいるのです。勉強を続けていくためにも、家事に支障をきたさないようにかなり慎重に時間調整をする必要があると感じています。

私は勉強とエッセイを書くことに夢中になっています。家は片付かなくなっており、夫は今朝きれいなシャツが無かったのをいやがりました。私はまた、今夜若干遅めに紅茶を飲みました。そして私たち夫婦は、ツナサラダを食べて一日を終えました。

エッセイはまだ勉強中で、それを完成させるまでに私は、事実を収集し、それを筋道のとおったエッセイとして構成し、タイピングするのに24時間を費やすでしょう。

私だけではなく、すべての人が問題としていることを学ぶのに役立つので、明日の個別指導時間を私は楽しみにしています」(Coare and Thomson 編、1996、156ページ)。

これらの記述は、1990年代半ば、「1,000人の学習者の日記（the Diary of A Thousand Learners)」を記録するために、NIACE が主導したプロジェクトの成果である *Through the Joy of Learning* に載ったものである。その中心的なメッセージは、機会や支援を得ると、成人は、学習を通してすばらしい才能、快活さ、創造性を見せるということである。またそのことは、「成人学習者週間賞」の中心的な教訓でもある。1998年、NIACE はこの豊かな経験を生かして、政治家や実践家に助言するために「全国成人学習者フォーラム」を開催することを決めた。

1990年代を通じて、国策における生涯学習の重要性がしっかり再評価されるようになった。イギリスにおいてそのような傾向は、学習社会を創造していく決意を宣言した1997年の政府の選挙で加速した。継続・高等教育大臣は、第一回全国フォーラムを開催し、学習者の提案について、学習者とともに率直かつまじめに議論した。そして政府は、「学習と技能の時代」に向けた2000年の法律に、学習者の声に耳を傾けることをその責任として組み込んだ。全国フォーラムの次の会議では、教育機関が自らの実践を適応させているかもしれない社会的慣習に注意が向けられたが、面白いことに、それはより議論を引き起こすものであった。教育提供者は、自分たちの実践に対する批判を聞くことがより困難であることに気づいた。既存の学習者・潜在的学習者の意見が、教育提供者の政策面での優位性を強めるためだけに聞き入れられることのないよう、絶えず努める必要がある。

学習者中心のシステムを構築することは、国策で宣言された目標である。しかし、言うことは実際に行うことよりずっと簡単である。理想と現実とのギャップを強調することは、政府の

広い政策目標が成人学習者に好意的であるとき、NIACE の重要なアドヴォカシー活動となる。困難は広い理想にあるのではないのだ。首相への政策助言チームのひとつのリーダーである Geoff Mulgan は、政府の広い政策目標を次のようにうまく表現している。

「政府がもはや防衛や経済に対し主権を行使していない世界において、政府が市民に対して行いうる最善のサービスは、市民がより強くなり、より責任を持ち、より決断力を持ち、自分が住んでいる世界をより一層理解できるよう援助することである。狭く見てもこのことは、習慣的に規律に厳しく柔軟性があり、創造的で適応力があるといった、雇用対象者となるための技能を市民に提供することを意味する。より広く見ればこのことは、市民が自分で自分の面倒を見ること、他者をケアすることを援助し、生活技能や感情的な知（古い教育システムにおいてかなり価値づけられてきた分析的な知よりむしろ）をはぐくんでいけるよう援助することを意味する」(Mulgan, 1997)。

David Blunkett は、上で引用したのと同じ記事の中で次のように主張したとき、生涯学習に関する政策目標の包括的定義におそらく最も関わっていた。

「学習は、われわれの経済的な未来を確保するだけでなく、より幅広く貢献するものであるだろう。学習は、われわれの社会が文明化するのを援助し、われわれの人生における精神面を発達させ、能動的な市民性を育成していくのである。学習は、人々が自分のコミュニティで十分な役割を果たしていくことを可能にする。学習は、家族や近隣、結果として国家を強めるものである」(DfEE, 1998)。

けれども、現場でこれらの目標を実践に変えることは一つの挑戦である。大蔵省（世界の大部分では経済省のようなもの）は、見返りが測定可能で早いものに対する支出を好む。コミュニティベースの学習におけるより緩やかな活動方針は、労働市場のニーズと明確に関連している資格取得の学習より擁護するのが難しい。人生においてずっと、職業に結びついた教育および訓練システムの中で活動してきた人々は、コミュニティにおける学習で何が最もよく機能しているかをほとんど知らない。また、多くの実践家は、効果的なアウトリーチ活動の技能を欠いている。Blunkett も主張したように、タンカーの向きを変えるには時間がかかるが、まず第一に、自分がどこへ行こうとしているのかを知る必要があるのである。NIACE の仕事は、タンカーが正しい方向に向けられていることを確実なものにしようとすることである。

NIACE は、「成人・コミュニティ学習基金」の合同管理を介して、コミュニティベースの学習の可能性を広げる革新的プロジェクトの運営で、政府と密接にかかわって仕事をしている。そのような活動は、成人に対する新たな学習機会の構築に学習者を関わらせるための、地方コミュニティベースの率先的活動を支援し、その成果を広範に広めてきた。NIACE は、実践家と政策決定者に対する率先的なトレイニング活動を支援している。また、NIACE は、実践と

政策との情報伝達を強化する多くの実践家ネットワークを補助している。そしてもちろん、セミナー、会議、スタッフ開発プログラム、出版を通じたNIACEの研究活動と優れた実践活動はすべて、同じ目標に向かっている。

現在、NIACEの主要な全国的アドヴォカシー活動は、新しく設立された「学習技能協会」が、成人に好意的であることを保障することに焦点が当てられている。この団体は、2000年に制定された法律の結果として創設され、今年から、イングランドの大学レベルの下位に位置するすべての継続教育、職業訓練、コミュニティ教育の企画活動および、それらに対する資金提供活動を始めた。それは膨大な作業であり、かなり多様な団体文化の結合作業を伴っている。まず学習技能協会は、協議のために、団体の活動計画案を発表した。その計画案は、NIACEの観点からすれば、検討課題文書において示されてきた焦点を、役に立たないものに狭めてしまうものだった。特に、成人全体を参加対象とせずに、対象を提示していることに関してそうであった。NIACEは10年間、社会的に排除されたグループに手を差し伸べる際の成功を見極める最善の尺度として、成人の参加対象者を確保するために闘ってきた。そして1998年、全国的に対象者を確保することに成功した。NIACEのメンバーは、仮に学習技能協会が、中心的な目標として参加者層を広げることを断念しているように思われるとしたら、NIACEの動きは役に立たないだろうと感じていた。そう感じたのは、とりわけ同協会のスタッフの多くが、より狭く焦点化された学習提供活動の中で経験を重ねていたからである。その後、初期の説明会、手短な公開討論、非公開の説明会、熱心なロビイング活動によって、2002年から成人全体を対象として含めるという誓約をとりつけることができた。

対象の問題に対処したのと同時に、NIACEは、教育技能協会において、成人に影響を与える別の資金調達システムや管理運営システムを導入するのに必要な移行作業が成功するよう尽力した。NIACEは、教育技能協会において、次長のひとりがコミュニティベースの成人学習の財源および構造の問題に取り組むのを、そして他のスタッフが基礎教育の問題に取り組むのを支援した。NIACEのメンバーは、学習の質や伝達に関する取り組みにおいて、多種多様な学習者の興味関心が配慮されることを保障するために設立された、多くの諮問委員会の活動に寄与した。NIACEはまた、教育技能協会に専門的な支援や助言を提供するために、補助的な役割を果たすことを取り決めた。それらの取り決めの鍵となる要素は、同協会のために活動している請負業者としてのNIACEの義務と、同協会のメンバーを代表してアドヴォカシー活動を行っているという、彼らに対するNIACEの責任との境界を明確に理解することだった。結局、それらの役割間の緊張関係は、公開性や信頼を通じて解消されている。

成人は、整然とした学習者ではない。成人の興味関心は、多様な社会政策の動向を超えた広がりをみせている。その証拠として、学習と健康の領域において、学習を続けることが能動的な市民性を助長し、死を遅らせることが明らかになってきている。町医者が多くの症状に対して、薬より学習を処方することは有効である。NIACEは、医者の診療過程に学習アドバイザー

を配置することの利点を強調するため、「学習処方箋プロジェクト（a Prescriptions for Learning project)」を実行している。しかしながら、政府の部局を越えて国策に影響を与えることは困難であり、かなりの忍耐強さを要するものである。もし教育費用を適度に上げることで健康面での利益が確保されうるなら、3つの政策部局（健康省、教育省、大蔵省）は次のことに納得する必要がある。それは、そのような活動が優先され、それぞれの部局が異なった目標を持つということだけでなく、しかるべき所に政策効果を評価するための基準が置かれうるということである。じっとしていること、忍耐強くあること、短期間で積極的に妥協しようとすることは、長い間妥協しないことと相まって、熱心なボランタリー団体の特性である。環境活動家が証言しうるように、多くの政策活動は、アイデアが変革の雰囲気をつくり出せるほどの人に常識として認められる前に、多くの失敗を伴うものである。

この論文では主に、イングランドにおける国策の変化に注意を向けた。しかしながら、成人学習に影響を与える政策は、地方、地域、国家、超国家レベルにおいても形成される。発展した国家行政は、NIACEが、そのウェールズ部門である「NIACE Dysgu Cymru」を通じて、ウェールズで異なるアドヴォカシー役割を維持する必要性を示唆している。地域政府の成長によって、NIACEの地域スタッフは、多様な政策的イニシアティブに対し、地域的に異なる対応をしていくことを支援するようになった。NIACEはまた、ヨーロッパレベルで政策に影響を与えるために、「ヨーロッパ成人教育連合」の活動に寄与しているし、グローバルには、「国際成人教育協会」の活動に寄与している。

周辺化されたグループに対するアドヴォカシー活動もまた、NIACEの活動の中核である。NIACEの量的研究によると、学校後の教育および訓練において、労働者階級の成人、高齢者、障害者、民族的・言語的マイノリティ、パートタイム労働者、旅行者、資格を持たない人々、早い段階で学校教育から離れた人々、田舎のコミュニティの人々はすべて、比率として小さいことが示されている。参加や達成への障壁に関する研究を通じて彼らのニーズを明らかにすること、特定のグループにとっての障壁を克服するために何が役立つかを説明する資料を提示することがNIACEの研究活動の主な特徴である。障壁の多くはもちろん、周辺化されたグループのいくらかないしすべてにとって共通のものである。しかし同様に、それぞれのグループが直面している特定の課題もある。NIACEの近年の活動は特に、成人学習がいかにして、仕事や社会的資本がほとんどないような最貧のコミュニティの経済的・社会的復興を、最善の方法で支援しうるかに焦点を当てている。それは骨の折れる活動であり、もちろん忍耐強さが必要な活動である。しかしながら、かなりやりがいのある活動なのである。

そのような活動では必然的に、成功と同じくらいの失敗がある。活動の多くは、教育サービスを届けるメカニズムの外にある、私的な交渉を含んでおり、学習者に見えないものである。実際、最も成功したアドヴォカシー活動のいくらかは結果的に、役に立たない変革案として、中断されてしまっている。対照的に、公的なアドヴォカシー活動は本当に、文化的変容に寄与

している。成人学習の豊穣さや多様性を祝うことは、学習を自分の生活における一つの選択肢としてとらえるだけの自信を人々に与える点で重要である。それは、しばしば学習者が自分の勉強するコースで切り抜けていくような、個人的な苦闘にさらなる価値を与えている。また、かなり楽しむ機会を提供してもいるのである。